

「大峯千日回峰行 修験道の荒行」 塩沼 亮潤, 板橋 興宗 著 春秋社 2007年3月発行

Quae sit sapientia, disce *Shugendo*.

本書はジャケット買い（ジャケ買い）した。

表紙の写真には、白装束に身を包んだ修行僧が大峯奥駈道（奈良の吉野の山々）を進む後ろ姿。中景。霧に霞んでいる。表紙左上にフォントサイズ 57pt の赤縁白抜きで「大峯千日回峰行」の縦書き、副題に「修験道の荒行」とある。

てっきり大阿闍梨の修行ドキュメントか荒行解説の本かと思ったが、然に非ず、塩沼亮潤大阿闍梨（しおぬまりょうじゅん・だいあじゃり）と板橋興宗禅師（いたばしこうしゅう・ぜんじ。大本山総持寺元貫首、曹洞宗元管長）との対談をまとめた一冊である。

題名は恐ろしいようなものであり、また、大阿闍梨と曹洞宗管長との対談とは畏れ多いようなものであるが、本書の実際は、気さくなお二人の和気に溢れた語らいである。

塩沼 禅師様のおっしゃるとおり、人間はだめだと思ったらそこで終わりです。そうではなくて、自分ならできると自信を持つことです。自信と過信は違います。自分の努力に対しての自信です。だから、絶対にあきらめないこと。粘り強く、根気よく、ぼちぼち、です。(143頁)

板橋 何が煩惱かといったら、それを愚痴ることです。愚痴るといのは、人間だけです。(210頁)

本書「おわりに」に板橋禅師がいう、「以前から比叡山の酒井雄哉阿闍梨さんの『千日回峰行』のことを知り、人間の範囲を超えた猛修行ぶりに、畏敬の念を抱いておりました。／それを若い青年僧、しかも同郷の仙台出身の僧がやり抜いたことに驚き、深い敬愛の念を抱きました。…中略…／阿闍梨さんのような青年僧がおられることを知り、この日本の将来にも希望が持てる明るい気持ちになりました。ありがとうございます。嬉しいです。」(228～229頁)

共に宮城県出身のお二人であるが、年齢には41歳の開きがある。

板橋興宗禅師は、残念ながら昨年（令和2年）7月老衰で亡くなった。93歳であった。

塩沼亮潤大阿闍梨は現在も、福聚山慈眼寺（宮城県仙台市太白区秋保町）の住職を務めながら、講演や雑誌のインタビュー、地元ラジオへの出演など、各種メディアをとおして「執らわれない心」の大切さを説いている。清々しい修験僧だ。

版元・春秋社のホームページには、塩沼亮潤大阿闍梨による講演会の模様が一部、動画で紹介されている。慈眼寺のホームページもまた情報豊かである。

*余註：題句は羅語の格言を模倣した。